全国公立学校難聴言語障害教育研究協議会 第1回 全国理事会

日時 ： 令和５年５月１３日 １３時

場所 ： 世田谷区立駒沢小学校

＜会長挨拶＞

世田谷区立駒沢小学校校長 鈴木 聡 様

今年度は４年ぶりとなる対面での理事会開催となりました。不慣れな点は、どうぞご容赦ください。２年後の１１月には、デフリンピックが東京で開催されます。駒沢小から近い、駒沢オリンピック公園が会場になります。このご縁を、子供達の成長に繋げる良い機会としていきたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

＜来賓挨拶＞

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官 堀之内 恵司 様

少子化で児童数が減少する中、特別支援教育への保護者の理解や認識の深まりと共に、特別支援学校だけでなく、通常の小・中・高校においても、特別支援教育を必要とする児童生徒が増加しています。令和３年度の通級児童数は過去最多を記録しました。それに応じて、担当教師に期待される専門性も高まっています。本研究協議会が全国の難聴言語障害教育の発展・充実に努められていること、ありがたく思います。

文科省では、今年３月、通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援のあり方に関する検討会議報告を取りまとめました。支援を必要とする児童生徒の増加や、令和４年９月９日にあった障害者権利委員会第一審査における総括所見と、同年１２月１３日に公表した通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果等を踏まえ、可能な限り全ての児童が同じ場で共に学ぶための環境整備をはじめ、よりインクルーシブな社会の実現に向けた施策についても記載されています。また、児童生徒が慣れた環境で指導を受けられるように、自校通級や巡回指導をはじめとする通級指導を充実すること、担当する教員の専門性を高めることなど、通級指導に関わることについても提言されています。文科省としては、特別な支援を最も的確に提供できるように努めてまいります。

東京都教育庁主任指導主事就学相談担当 深谷 純一 様

東京都では、現在小学校のみに言語障害学級が設置されていますが、昨年度に実施された調査で、設置を希望するご意見をいただき、令和６年度に規定を整備して中学校の言語障害通級指導学級を設置できようにしていきます。

現在東京都は、特別支援教育推進計画第２期の第２次２年目に当たり、来年から第３次に入ります。特別支援学校のセンター的機能の活用や、研修の充実を図りながら、東京の教員の専門性向上を進めていきます。各県の研究組織が相互に親密な関係を保ち、難聴言語障害教育の振興を図られること、指導の質の向上が図られることを期待しています。

世田谷区教育委員会事務局教育総合センター　センター長　宇都宮　聡　様

本区には、会場校である駒沢小学校をはじめ、きこえの教室が小学校２校、中学校１校、ことばの教室が小学校４校の合計５校７学級で指導しています。世田谷区内だけでなく近隣地域の児童生徒も受け入れながら、ＩＣＴなどを活用して、一人一人に寄り添った指導を行なっています。共生社会の実現に向けて、障害のある幼児児童生徒の自立を目指して、社会に貢献できる人材を育成するという基本的理念をもとに、世田谷区における特別支援教育のより一層の充実を図っていきます。本会で得られる情報が、多くの先生方の資質向上に繋がり、より多くの子供たちの個性が最大限発揮できるように願っています。

NPO法人全国ことばを育む会副理事長　宮本　紀子　様

まず、理事長である今岡の挨拶を代読します。「子供達の目を見て、口元を見て、笑顔で心を伝え合うのが教育の基本ですが、私たちことばを育む会も、このコロナ禍では本当にもどかしい思いをしてきました。とりわけ、親同士の交流が途絶えてしまったことが一番大きな課題として残っております。３年間の断絶を再び取り戻すには大変な努力をしないといけないでしょう。先生方にも、親たちの間に立っていただくよう、この場をお借りして心からお願い申し上げます。」
昨今の働き方改革はとても大切な動きではありますが、先生方のお仕事が整備される中で、昔のように先生と保護者、保護者と保護者が繋がりをもてる時間や機会が減ってきたために、親の心配が大きくなってきているのではないかと感じています。親は一人で悩むとろくなことを考えません。保護者同士の横の繋がりを通して、先輩保護者の話を聞き、安心することができます。ぜひこれからも、先生方に保護者の横の繋がりを支えていってほしいと願っています。ことばを育む会では、中学校の通級指導教室設置についても課題としています。設置のみならず、担当者の育成もぜひしてもらいたいと思います。コミュニケーションや読み書きの困難さについて、校内全ての教員に周知していただけるような、力のある先生に担当をしてもらいたいなと思います。

＜小川再治研究協賛会　について　　事務局長より＞

小川再治研究協賛会は、東京学芸大学の名誉教授である小川再治先生が設立されました。小川先生は、平成４年度まで東京学芸大学で教鞭を執られ、東京学芸大学ご勇退後に、難聴・言語障害教育の振興、発展及び後進の育成に役立てるため、小川再治研究協賛会を設立されました。全日本聾教育研究会と全国公立学校難聴言語障害教育研究協議会が協賛基金をお預かりして、難聴言語障害教育の振興、発展に努めることをお約束し、毎年研究活動を報告してきました。残念ながら平成２６年に小川先生はお亡くなりになりましたが、その前年まで全国理事会に毎年お越しいただき、貴重な体験談をお話してくださいました。平成２７年度以降は、奥様の小川昭子先生がそのご遺志を継いで、会長として理事会にご臨席いただいていましたが、今年９２歳というご高齢のために残念ながら出席を見送られました。後日、全難言協に送ってくださいました手記をＨＰに掲載いたしますので、ぜひご覧ください。

＜議事＞

〇令和４年度　事業報告、決算報告　承認

〇令和５年度　新役員案、事業計画案、予算案　承認

〇令和５年度　第５２回全国大会埼玉大会について　埼玉大会実行委員会より挨拶・現状報告

・大会主題：「彩～豊かな学びと共生社会の実現を目指して～」

・期日及び会場：令和５年７月２７日（木）～２８日（金）　大宮ソニックシティ　にて

・第５５回全情研埼玉大会との共同開催。

〇令和６年度　第５３回全国大会沖縄大会について　沖縄大会実行委員会より挨拶・現状報告

・期日及び会場：令和６年８月９日（金）～１０日（土）　那覇文化芸術劇場なはーと　にて

〇令和７年度　第５４回全国大会東京大会について

東京大会準備委員会より挨拶

〇令和８年度以降の全国大会は、新しい輪番表にて割り振っていく。

＜国の特別支援教育施策について＞

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官　堀之内　恵司 様

１ 特別支援教育を受ける児童生徒の数について

特別支援教育を受ける児童生徒は年々２～３万人増加し、通級指導を受ける児童生徒は１０年間で２．５倍に増加している。他国に比べると、特別支援教育の対象となる児童生徒の割合が少ない。

２ 特別支援教育を行う場について　～国による違い～

イギリス、アメリカ、イタリア、ノルウェーなどは、通常学級で一緒に学習している。日本、韓国、フィンランド、フランスなどは、通常の学級に在籍することもあれば、特別支援学校に在籍することもある。ドイツ、スイス、デンマークは、特別支援学校で学習している。

３ 通級指導について

発達障害のある児童生徒が非常に増えており、担当教員を確保する必要がある。教員数の算定基準の改訂を行い、児童生徒１３人につき１人の教員が配置されるように、平成２９年から令和８年の１０年間で、段階的に教員数を増やしている。

高等学校における通級指導は平成３０年に制度化された。令和３年度に通級が必要と判断された生徒数は２５１３人だったが、実際に通級指導が実施されたのは１６７１人だった。本人や保護者が希望しなかった場合もあれば、担当教員が配置されずに指導体制が取れなかった場合もあったようだ。

４ 通常の学級に在籍する特別支援教育のニーズがある児童についての調査

（ア） 学習上または行動上に著しい困難を示す児童生徒の割合は、小中学校で８．８％、高等学校で２２％。小中学校では、１０年前よりも非常に増加していた。

（イ） 校内委員会において教育的支援が必要と判断された児童生徒は２８．７％で、１０年前に比べて１．６倍の増加。実際には指導を受けられていない児童生徒もまだまだ多い。

（ウ） 個別指導計画や個別の教育支援計画の作成については、１０年前に比べて作成数が倍増。作成の意義や必要性、理解が進んでいる。

５「通常の学級に在籍する障害のある児童生徒に対する支援のあり方に関する検討会議」からの提言

（１）校内支援体制の充実・見直し

校長のリーダーシップのもと、児童生徒の実態を的確に把握して、必要な支援を組織的に行う。

（２）通級による指導の充実　※６にて詳細に説明

（３）教員の専門性の向上

国立特別支援教育総合研究所や教職員支援機構などのオンライン学習コンテンツ、全難言協主催の研修会等を積極的に利用するように進めていってほしい。文部科学省が作成した、初めて通級指導を担当する教員向けのガイドも参照してほしい。各都道府県や政令指定都市教育委員会もガイドを作成している。

（４）高等学校での通級指導体制を整える。

（５）特別支援学校のセンター的機能を充実させていく。

（６）インクルーシブな学校経営モデルを創設する。

多様な教育的ニーズに柔軟に対応していくために、特別支援学校を含めた２校以上の学校を一体的に運営する、学校運営モデルを作っていく。

６「(2)通級による指導の充実」について

・保護者の送迎に関する負担を減らし、子供達が慣れた安心した環境で学習できるように、在籍校での自校通級や巡回指導をより一層充実させていく。障害の特性による指導効果や本人保護者の意向により、他校通級が望まれる場合もあるので、実情に応じた柔軟な対応をするように留意する。「サテライト方式」なども検討しながら、柔軟な対応を進めていく。

・通級指導を主体的に受けるために大切なこと

本人、保護者が通級指導の仕組みを理解し納得した上で指導を受けることができ、指導を受けた成果を感じられること。

・通級で学習したことが、在籍学級での生活や学習の向上、さらには将来の生活につながっていると、児童生徒が実感できること。

７ お知らせ

・「障害のある子供の教育支援の手引き」の発行　令和３年６月

・「聴覚障害の手引き」の改訂　ＨＰでも見ることができる。

・「季刊誌　特別支援教育」

＜国立特別支援教育総合研究所より＞

国立特別支援教育総合研究所　支援部総括研究員　滑川　典宏　様

主任研究員　谷戸　諒太　様

令和５年度の研修事業では、現在、第１期の専門研修が始まっています。今まではオンラインで実施していましたが、昨年度から対面も含めて実施しています。今年度は第二期を９月６日から１１月１０日まで実施し、１０月２日から２０日が対面期間となっています。堀之内先生をはじめ、全難言の先生方にもお力添えをいただきながら、研修を実施しています。研修を通して繋がりを育んでいきたいと思います。研究所公開を対面で１１月３日に、研究所セミナーを３月３日に、特別支援教育推進セミナーを各ブロックに分けて地域で実施します。ＨＰなどでご覧になりながらご参加ください。

＜NPO法人ことばを育む会より＞

NPO法人ことばを育む会副理事長　宮本　紀子　様

　ことばを育む会の運営は、先生方の支えが基盤となっています。今後もご支援をいただきたいと思います。以前から「中学校に言語通級指導学級を作りたい」という声を、ことばを育む会でも挙げてきたので、今回の理事会でその方向性を聞くことができ、嬉しかったです。

　今は昔のように保護者会などを実施することが難しくなり、親同士の横の繋がりがなくなってきています。親同士が繋がれないと、良い情報を仲間うちから聞くことができないし、励ましの言葉ももらえません。親の会が消滅していく地域も増えていっています。ＩＣＴが発達してきても、直接会うことが一番です。

　また親は、ことばの教室の先生が一生懸命やってくださっているのに、そんな先生方が周りに認められないこと、ことばの教室が学校内で浮いてしまっていることにも悩んでいます。また、時には一生懸命やってくれない先生がいることにも悩んでいます。特別支援教育はみんなで取り組むものだという意識を、学校全体で高めていってほしいです。

＜各都道府県の難聴言語教育や特別支援教育に関する情報交換＞

・経験の浅い先生の指導力を高めるために、研修会、講演会、授業研、ケース会議、情報交換会などを開いている（対面だったりオンラインだったり）。大学の先生、病院の言語聴覚士さん、特総研や全難言の先生方に講師をお願いしている。
・人事異動で担当が変わって経験者が育たない。管理職の理解啓発も課題となっている。管理職に通級の実態や担当者の思いを理解していただきながら、人事や連携を進めていきたい。
・現任者向けの、より専門性を高めるための研修がなくなってきている。
・県内の移動手段が少なく、集まって研修をすることが難しい。
・教員によって経験の差はあるが、アセスメントだけでも統一して、的外れな支援や指導がないようにしている。
・難聴学級は増えているが、なかなか研究会の会員になってもらえない状況がある。聾学校の先生中心に研修会を進めてもらっていて、「入ってよかったな」と思える研究組織にしていきたい。
・研究会の組織が、発達障害の通級指導教室も含めた組織になっている。

・特別支援学級では１学級８名だが、複数の学年が混在することがあり、十分な支援が行えないという課題がある。学級編成基準の見直しをしてほしい。
・中学校の英語スピーキングテストが始まり、通級卒業生に対してアンケート調査をしている。声を聞きながらどんな支援ができるか考えていきたい。
・サテライト方式によって子供が通級しやすくなり、通級の認知度が上がってきているが、課題もまだまだ多い。
・高等学校で巡回式の通級が開始されている。

・幼児のことばの教室があるが、法的な設置根拠がないので、先生方の身分や子供の受け入れに課題がある。
・１年程度で改善する見込みのある児童を対象にしたサポートルームをすべての学校に設置した。ただし、１年で改善できない場合は通級や支援学級に進めていく。
・通常学級の先生がインクルーシブの意識をもっていないことが課題になっている。

以上